

『信仰告白と証し』 ヨハネの福音書 1 章 19～28 節

1. あなたはどのですか

本日の箇所には、まだイエス様は登場してきておりません。イエス様に先立って、ヨハネがその証言をしているところです。ヨハネはこの時人々に洗礼を授けていました。大勢の人々がこのヨハネのもとにやってきました。そうしますと、イスラエルの人々はエルサレム、つまり神殿にいた宗教的な当時の指導者、サンヘドリンという議会を形成していた人たちがヨハネのところに使いを送って質問をさせます。「**あなたはどなたですか**」

19 節の冒頭に「**さて、ヨハネの証しはこうである。**」とあります。ヨハネがどういう「証し」をしたのが、この 19 節以下に語られていくわけです。ヨハネは、イエス様について「証し」をするため遣わされたのですから、ここには、ヨハネがイエス様について語ったことが記されているのだろう、と私たちは思います。ところがこの 19 節以下に語られているのは、「**あなたはどなたですか**」と問われたヨハネが、「私はこれこれではない、これこれだ」と答えたということです。つまりヨハネはここで自分のことを語っている、自分のことを「証し」しているのです。

エルサレムのユダヤ人たちから遣わされた人々はヨハネに、「**あなたはどなたですか**」と尋ねました。それは彼の名前を尋ねたものではありません。ヨハネは、25 節以下に語られているように、人々にバプテスマを授けていました。

ルカの福音書の冒頭にはヨハネの誕生の記述が記されております。それによると、ヨハネの父ザカリヤは祭司であったと記されていますし、母のエリサベツはアロンの子孫であったと記されています。アロンというのはモーセの兄弟です。それで、神殿ではこのアロンの祭司の子孫が神殿での奉仕に携わっていました。神殿側としてはヨハネがその当時していたこと、人々を悔い改めさせて洗礼を受けさせる、その噂がエルサレムにまで届いていたということですから、そういう意味でも、ヨハネが何者なのかということを正確に把握したいと考えていたようです。

ヨハネが、授けていたバプテスマは、人々と神との関係を正しく整えることを意味して、神から遣わされた者としての権威がなければできないことだったのです。エルサレムから来た人々は、「お前にそんな権威があるのか、何様だと思ってそんな大それたことをしているのか」という思いを込めて「**あなたはどなたですか**」と尋ねたのです。

私たちは普段、あまりこういうことについて自分自身に問うということはしないのかもしれませんが、では、私は何者なのか。この問いかけは、ヨハネ自身にしてみれば、自分の存在意義を問われている問いであったに違いありません。そして、その問いが私たちに向けられる時も、実は、私たちも、自分とは何者なのかということについて、自分自身で答えが出せなければならないのだらうと思います。

このヨハネの答えは、簡単に「私は・・・ではない。」と三度繰り返して答えています。このヨハネの答え方は、モーセに神がご自分を啓示された時の言葉を思い起こすような答え方をしています。出エジプト記 3 章 13～14 節に「**モーセは神に言った。「今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。」**神はモーセに仰せられた。**「わたしはある」という者である。」**また仰せられた。**「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」**とあります。どうということかと言いますと、「**あなたはどなたですか**」とモーセが尋ねると、「**わたしはある**」と答えます。英語で「I am who I am」という言葉です。ここで、このヨハネの答えも「No, I am not」、「私は、なにになにではない」という言葉になっていて、神がご自分を語られた時の言葉を思い起こすように書かれています。

これはとても大切なことなのですが、神がご自分のことを語った時に、「**わたしは、なにになにだ。**」と言われます。実は、ヨハネの福音書では、この言葉がカギになっています。この福音書の中に七回、イエス様がこの言い方を使ってご自分を紹介なさいます。「**わたしは世の光です**」「**わたしはいのちのパンです**」「**わたしは羊たちの門です**」

「**わたしは良い牧者です**」「**わたしは神の子である**」「**わたしはよみがえりです。いのちです**」「**わたしはまことのぶどうの木**」。そのように、これから七回にわたってイエス様の自己啓示の言葉が出てくるのですが、それに先立って、この福音書の冒頭で同じ言葉を使いながら「私は、違う」と語っているのです。それは、つまりこれからヨハネが紹

介しようとしているお方こそがそのお方なのだという、明確な意思を持っているのです。

2. ヨハネの証し

ヨハネは、この問いに対して、20 節に「**ヨハネはためらうことなく告白し、「私はキリストではありません」と明言した。**」とあります。「**キリスト**」は、神が約束して下さった救い主を意味しています。エルサレムから遣わされた人々は、あなたは自分が救い主だとも思っているのか、と厳しく問うたのです。それに対してヨハネは、「いや、私は救い主ではない」と言ったのです。

さて、ヨハネが「**私はキリストではありません**」と言ったことを受けて人々は「**それでは、何者なのですか。あなたはエリヤですか。**」と尋ねました。「**エリヤ**」は旧約聖書に出てくる預言者ですが、救い主の先駆けとしてもう一度現れる、と旧約聖書にあります。あなたは自分が救い主、キリストではないけれども「**エリヤ**」だと言うつもりなのか、と彼らは問うたのです。それに対してもヨハネは「**違います**」と答えました。すると彼らは更に「**では、あの預言者ですか。**」と尋ねます。「**あの預言者**」というのは「**モーセのような預言者**」のことで、神による救いが実現する時に遣わされると考えられていた人です。しかしヨハネは、それに対しても「**違います**」と答えました。つまりヨハネは、「私は救い主ではないし、神による救いをもたらす者でもない」と言ったのです。

しかし、エルサレムから来た人々は、彼の答えが「**〇〇ではない**」ということばかりなので満足しません。「**あなたはだれですか。私たちを遣わした人たちに返事を伝えたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。**」と問うたのです。あなたは何者なのかと問うているのだから、〇〇ではない、と言うだけではなくて、私はこれこれだ、とはっきり言ってほしい、ということです。それに対してヨハネは、「**私は、預言者イザヤが言った、『主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声』です。**」と答えました。これはイザヤ書 40 章 3 節の引用です。バプテスマのヨハネの出現が、イザヤ書 40 章の成就であることは、他の三つの福音書も共通して語っています。しかしヨハネ自身が「私は**荒野で叫ぶ者の声**」と語っているのはこのヨハネの福音書のみです。バプテスマのヨハネは、自分が「**荒野で叫ぶ者の声**」であることを自覚して、その「**声**」であることに徹して生きたのだ、とヨハネの福音書は語っているのです。

この「**声**」という言葉は、この箇所以外で使われる時は、イエス様の「**声**」か、神ご自身の「**声**」という意味でしか使われない限定された言葉です。

ヨハネは「**声**」であることに徹して生きた、それは即ちヨハネは「**証し**」のために生きた、ということです。ヨハネは、イエス様を「**証し**」する「**声**」として生きたのです。彼は、私は救い主ではないし、神による救いをもたらす者でもない、私は「**主の道をまっすぐにせよ**」と「**叫ぶ者の声**」と語ったことによって、イエス様を「**証し**」したのです。「**ヨハネの証しはこうである**」という 19 節からのところでヨハネは、問いに答えて自分のことを語っています。自分は救い主ではない、それはイエス様こそが救い主であるということです。そして、自分は「**主の道をまっすぐにせよ**」と叫ぶ「**声**」だと言ったことによって彼は、到来しようとしている救い主イエス・キリストに人々の心向けさせようとしたのです。このようにヨハネは、自分のことを語ることによって、まことの救い主であられるイエス様の「**証し**」をしたのです。

26～27 節には、救い主でも救いをもたらす者でもないあなたが、なぜバプテスマを受けるのか、と問いつめる人々に彼が「**私は水でバプテスマを受けていますが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。その方は私の後に来られる方で、私にはその方の履き物のひもを解く値打ちもありません。**」と答えています。この答えも、なぜバプテスマを受けているのかという問いへの直接の答えではなくて、あなたがたの知らないまことの救い主が既に世に来ておられる、私はその方のための備えをしているのであって、その方の履物のひもを解く値打ちもない者だ、と言うことによってイエス様を指し示しています。「**私は**」と自分のことを語っていながら、実は自分のことではなくてイエス様のことを、イエス様こそが救い主であることを「**証し**」している、それがヨハネの「**証し**」だったのです。

3. 証しは信仰告白

ヨハネの福音書は、バプテスマのヨハネがイエス様を「証し」するために神から遣わされたことを語っています。そのことは6節以下にも語られていました。そこで「証し」をするとは、自分が目撃したこと、知っていることを証言することだ、ということでした。そしてこのヨハネの福音書全体が、イエス様についての証言として語られていることでもありました。しかし今日の箇所におけるヨハネの「証し」を読むことによって気づかされるのは、ヨハネはただ自分がイエス様について見聞きして知っていることを語っているだけではない、ということです。彼の「証し」は「私は誰なのか」という内容になっています。彼は自分のことを語っているのです。正確に言えば、イエス様と関係を持って生きている自分のことを語っているのです。それによってイエス様を「証し」しています。ここに、イエス様を「証し」するとはどういうことが示されています。イエス様を「証し」することは、自分自身のことを語ることです。自分がイエス様と関わってどのように生きているのかを、つまり自分とは何者なのかを語ることによってこそ、私たちはイエス様を「証し」することができるのです。

イエス様についての「証し」は、第三者としての証言ではあり得ません。自分がどう生きているかを抜きにしてイエスとはこういう方だと語ることはできないのです。そういう意味で、イエス様についての「証し」は常に信仰の告白でしかあり得ません。「証し」とは、証言であると同時に信仰告白であるということ、バプテスマのヨハネの「証し」は示しているのです。その意味で、20節の「告白」と「明言」というのは同じ言葉です。この言葉が二度語られていることには大事な意味があるのです。ヨハネは「告白」をしたのです。「私は救い主ではない」と「告白」したことによって、「私の後に来る主イエスこそが救い主である」という信仰を「告白」したのです。

そしてこの「告白」するは、ヨハネの福音書が書かれた教会の置かれていた事情を知る上で重要な言葉です。この福音書の9章22節に「彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。」と語られています。また12章42節にも「しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちの気にして、告白しなかった。」と語られています。この二つの箇所において「告白する」という言葉がでています。いずれにおいても、イエス様を「キリスト」「救い主」と信じてその信仰を告白する、という意味で使われています。そしてユダヤ人、パリサイ人たちが、イエス様を信じる信仰を告白する者を会堂から追放すると決めていたことがどちらの箇所においても語られています。これが、ヨハネの福音書が書かれた教会が当時置かれていた状況だったのです。

この福音書は、他の三つの福音書よりも少し後の時代に書かれました。その時代、初めのうちはユダヤ教の一派とされていたキリスト教会の信仰が、ユダヤ教とは違うことが明確になってきて、ユダヤ人たちの会堂から排斥され、迫害を受けるようになっていたのです。その違いの根本は、イエス様こそがキリスト、神から遣わされた救い主であると信じ「告白する」ことです。そのように「告白する者」は会堂から追放する、というユダヤ人、ユダヤ教の側の意志が明確になっていたのです。24節に「彼らは、パリサイ人から遣わされて来ていた。」とあることはその事情を反映しています。19節には、その人々が「祭司たちとレビ人たち」だったとありますが、ヨハネの福音書は要するにユダヤ人の指導者たちがこぞって、イエスを救い主と「告白する」人々を迫害していた、という状況を語ろうとしているのです。バプテスマのヨハネはそのパリサイ人たちに対してははっきりとイエス様を「証し」し、イエスこそキリスト、神が遣わして下さった救い主であるという信仰を「告白」したのです。ヨハネの福音書はそういうヨハネを、主イエス・キリストを信じる信仰を「告白」して生きる信仰者の模範として描いています。主イエス・キリストを信じる信仰に生きるとは、このヨハネのように、イエス様こそ救い主であられるという信仰を人々の前で言い表し、「告白」し、イエス様を「証し」する「声」として生きることなのです。

4. 主イエスを証して生きる喜び

そのような信仰「告白」、「証し」が、自分自身のことを語ることと分ち難く結びついているということが、私たち

が受け止めるべき大切なメッセージです。ヨハネは、「あなたは何者か」という問いに答えて、「私はこういう者だ、このように生きているのだ」と語ったのです。

彼は「**私にはその方の履き物のひもを解く値打ちもありません。**」とも言っています。「履き物のひもを解く」ことは当時奴隷の仕事とされていました。つまりヨハネは、自分はイエス様に奴隷として仕える資格もない者だ、と言ったのです。このように自分自身のことを語ることによって彼はイエス様を「証し」し、イエス様への信仰を「告白」し、イエス様を指し示す「声」として生きたのです。

彼がこのように自分自身には何の力も資格もない、奴隷となる価値すらない、と語ったことは、彼が、自分には何の力もない、自分は何もできない、何の価値もない、と卑屈になり、自分などどうせ何もできないのだ、と寂しい、悲観的な、後ろ向きで消極的な、喜びのない生き方をしていた、ということでしょうか。あるいは、自分が決して前面に出ないように、いつも謙遜に、控え目に、目立たないようにしていなければ、という不自由で窮屈な思いによって無理をして生きていた、ということでしょうか。そのどちらでもありません。バプテスマのヨハネは、窮屈な思いも無理もしてはおらず、むしろ全く自由に生きています。バプテスマを授けるなど何様のつもりだ、と厳しく批判されても、堂々と、私はイザヤが預言していた「**荒野で叫ぶ者の声**」として、救い主の到来に備えてバプテスマを授けているのだ、と答えることができました。ヨハネは、卑屈になっているのではなくて、喜びに満たされているのです。神が自分を遣わし、用いて下さっていることを彼は自覚しています。自分がそういう者として生きている、生かされていることには意味があるということを彼は豊かに感じているのです。

考えてみますと、私たちが何者なのかというこの大切な問いも、ヨハネと同じように答えることができます。私もまたキリストを「証し」する者だと。神の言葉を聞いて、新しい自分を発見する。自分にはこんなに喜んで生きることができるようになったのだということをこの世界に「証し」することができることこそが、神が私たちに望んでおられることに違いないのです。

イエス様は、どのようなお方であったのか。そのことを知るために、心を注いでいく時に、私たちもまたヨハネと同じようにこのイエス様を知り、出会い、このお方のことをより深く受け止めることができるようになります。そして、それと同時に、自分が神の前にどのように受け入れられているのかを知ることにもなるはずです。どれほどイエス様に愛されているのか。どれほど私たちの罪が大きいのか。どれほど神を悲しませているのか。何がイエス様を苦しめたのか。そのことに心を向ければ向けるほど、私たちはイエス様の深い愛に触れられていくのです。そして、そのように愛して下さったイエス様を、私たちも心から愛したいと思うようになるし、この主を私たちも他の人に「証し」たいと願うようになってくるのではないのでしょうか。イエス様こそ救い主であるという信仰を「告白」し、イエス様を「証し」して生きる者は、このように自分自身を確立することができます。自分とは何者か、自分は何のために生きているのか、をはっきりと自覚して、人生を喜んで積極的に生き、敵対する者たちの前でも自由に堂々と歩むことができるのです。それらは全て、イエス様を信じる信仰を告白し、イエス様を「証し」する者に与えられる恵みです。

あなたはどうでしょうか。神に造られたとおりの自分に確信を持っていますか。それとも、本来の自分ではない自分に落ち込んでいませんか。あなたは、あなたが知っている他の誰かではないかもしれません。周りの人たちの持っている物や行動を見て、自分には「不足している、欠けている」と感じているかもしれません。しかし、あなたはそのまま愛されており、神はあなたのための将来と希望の計画を備えておられます。バプテスマのヨハネのように、あなたにも神の国で果たすべきあなただけの役割、他の誰も持っていない使命があるのです。

イエス様は、ご自身がまことの神であり、神の「ことば」であるのに、肉となってこの世に来て下さった方です。そのイエス様は、私たちの全ての罪を背負って十字架にかかって死んで下さることによって私たちの罪を赦して下さり、復活によって、私たちが死を超えた永遠の命に生きる者とされるための道を拓いて下さいました。このイエス様を信じてその救いにあずかり、イエス様の下で、イエス様と共に生きるなら、私たちは、バプテスマのヨハネと共に、自分自身のことを喜びをもって語るによってイエス様を「証し」し、イエス様を指し示す喜ばしい「声」として生きることができるのです。